

「伝統的な言語文化」の教材作りと学び合い

～『平家物語』（中学2年）を中心に～

松原 洋子

「伝統的な言語文化」の教材開発の方向性として、全く新しい教材を提供する方法と、従来からある教材を、別の視点から価値づける方法とがある。今回は『平家物語』の中から、上記2つの方法によって教材開発されたものを、大きな単位の中で扱う。

古典は単に古い書物というわけではなく、読者の「今」や「将来」に深くかかわるべき存在であるとの考えから、『平家物語』を様々な事柄とつなげて読ませていき、学習者にさらなる深い思考をさせるよう刺激していった。

さらに、これらを効果的な学び合いのもとに学習者が会得できるよう、「さりはか一ど」などを教師が仕掛けていった。

【キーワード】 「伝統的な言語文化」の教材開発 『平家物語』 学び合い 「さりはか一ど」
つながり

1. 研究のねらいと方法

1. 1 古典の教材化において必要な考え

中学生に「なぜ古典を学ぶのだろうか。」を考えさせることがある。「日本人として必要な教養を身につけるため。」「日本語の歴史やリズムなどを知り、日本語の奥深さを知るため。」などと彼らは答える。もちろんそれも大切だが、「古典が今の自分、これからの自分に生かせる存在」であることを考えている生徒は少ない。

もともと「古典」とは「単に古い書物」の意味ではなく、「四書五経など古代聖人の指し示す書物。または歴史的価値をもつとともに、後世の人の教養に資すると考えられるもの。」である。常に学問の傍らにあり、悩める人たちにこれからの生き方を指し示す存在であった。それゆえに、私は古典を教材化する際に、常に古典が「学習者自身が今の自分の生活、これからの自分の生き方につながって、道しるべとなるべき存在」であることを意識させたいと考えた。そこで、古典の取り立て指導をすることなく、様々な文章と比べたり重ねたりしながら読んだり、現在自分を取り巻く問題との関連を考えたりさせることによって、古典を将来の自分につなげることができると考えた。

1. 2 古典教材の開発方法

中学校の新学習指導要領が平成24年度から完全実施となることに伴い、「伝統的な言語文化」の教材研究・指導研究等が全国的に盛んとなっている。それに伴い、「新教材」の開発についても活発に議論がなされるようになった。

「新教材化」には2つの考え方があろうと思う。今まで教材化されてこなかった古典の一節を教材化しようとする考えと、従来から教材化されてきた文章を、従来とは別の扱いをし、別の視点から学ぶことによって、新しい価値を引き出そうとする考えである。

ここでは、『平家物語』を単位の中で扱う。そのさい、従来からある教材を別の視点からとらえ直したり、中学校ではなかなか扱わない箇所を教材化したりした。

1. 3 「学び合い」の学習の必要性

一斉学習の中では、教師が「学び合い」の機会を仕掛けていくことにより、教師にも学習者にもより効果的な「学び合い」が期待できる。その1つとして、私は通称「さりはか一ど」（座席表型自己評価

表・ミニポートフォリオ（注１）を活用している。授業終了４分ほど前から各自が書き始める「さりはか一ど」の大きさは、縦６cm、横３.５cmにすぎない。ここに「今日の授業への参加度・理解度・発見・一口感想・心揺さぶられた人」の５項目を書き、Ａ３用紙の台紙の中の自分の座席にあたる場所に貼る。教員はこれをＢ４に縮小印刷し、その日のうちに配布する。

この工夫により、学習集団全員の考えがその日のうちに披露され、自然に学び合いが始まる。次時のはじめ数分を使い、前回の「さりはか一ど」についての質問や意見を取り扱っていくうちに、復習もできるし、教師が補充したり学習者同士で深め合ったりすることもできる。学習者からみれば、全員の紙面発言の場となるので、意思表示や意見交流ができるし、お互いの自己評価を知ることになり、評価の仕方も学んでいくことになる。

教師から見れば、一枚で学習集団の到達度・全体的傾向・生徒の実態が把握できる。これを毎時間積みあげることで、ポートフォリオともなりうるので、ひとりの学習者の学びの軌跡を知ることでもできる。慣れてしまえば、学習者には好評である。今回の実践でも、「さりはか一ど」は欠かせない。

２ 実践例

① 育成を目指す言語能力

- ・同じテーマについて書かれた古文や現代文を比べ読みすることで、人間としての生き方について考え、自分の意見を持つことのできる能力と態度（「Ｃ読むこと」指導事項エ・オ）
- ・古文の表現の仕方や特徴に注意し、古文に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像して読むことのできる能力と態度（「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」指導事項ア（イ））

② 単元名 「生きる」を見つめる ―メモメント・モリ（死を想え）― ～『平家物語』を中心に

③ 単元の目標

- ①さまざまな文種の文章を重ね読みし、それぞれの作品を読み味わうとともに、共通するキーワードやテーマをつないで思考を深める。
- ②文学・説明文・古文それぞれの文章に使われている独特の表現や文章構成を意識して読み、日本語への関心を深めるとともに、それらを自分の文章表現にもいかそうとする意欲を持つ。

④ 単元設定の理由

現代の中学生（学習者）をとりまく状況は、大変複雑である。命が軽視されている時代ともいえる。なくならない戦争・赤の他人による突然の不条理な殺人・少年犯罪（殺人）や虐待死・責任感の欠如から生まれた人災による死・経済的に恵まれつつも迎える孤独な死・インターネット自殺・ＴＶゲームや漫画などに多発する、人の命が粗末に扱われる場面・子供に蔓延する「死ね！」という言葉・核家族化などが進み、老いや死を身近に感じられなくなっている現在……。

戦争が終わり、経済的に豊かになり、寿命ものびた。にもかかわらず、充実し満足した生き方ができずに苦しんでいる人は多い。死は人生の着地点であるにもかかわらず、日本ではこれまで死はタブー視されてきた。なんとなく今を生きているだけで、将来の夢も抱けない人を見るにつけ、ここで改めて、死の意味を考えさせることは意味があると思われる。

特に東日本大震災においては、地震・津波などによるたくさんの「死」が報道された。学習者にとっても、今や「死」と無縁の生活ではなくなったのではないだろうか。

死を語ることは、いかに生きるかを語ることでもある。死の意味を考えるからこそ、人は「今」を貴重に思い、生きることのすばらしさや他者とともにあることの意味を意識するようになる。「死にざま」は「最後の生きざま」なのである。学習者には重いテーマであるが、将来の人生設計を意識させるこのときだからこそ、命の尊さを再認識させるとともに、これからの人生をいかに充実させて「生きる」か

を考えさせたい。

今回さまざまな文章を多読させる。文中にある「死を意識して生きること、充実した人生を歩むことができる」「人は誰でも『自分の役割』を持って生きている」などの言葉を、自分の生活・人生の中でもつなげて考えてほしい。

また、たくさんの文章にふれることで、さまざまな日本語の姿にふれ、日本語への興味を持たせていきたい。なお、今回扱う『平家物語』は長い間人々に愛されてきた作品である。これにふれ、日本人にとって大切な文化財産であることを実感することが、国際理解学習にもつながっていくと考える。「死」を見つめさせるにあたり、身内を亡くした体験を持つ学習者たちをしっかりと配慮して学習を進めていきたい。

5 単元の構成・テーマとの関連・配当時間など（全15時間扱い）

単元	学習材	作者・筆者	文種	テーマとの関連・キーワード	言語・表現	時数
1	想う	五木寛之	随筆	メメント・モリ 人生・死・生きる意味	ナンバリング・ラベル・比喩・語り口調	1
2	心のバリアフリー	乙武洋匡	説明文	障がい・他人を認める 心・自分の役割	文章構成	1
3	デーケン氏の死生学	毎日新聞	記事	メメント・モリ 人 生・死・生きる意味・ ユーモア	ナンバリング・ラベル・引用	1
4	平家物語	作者不詳	古文	生・死・役割・変化 (無常観)	語り・古文	7
5	葉っぱのフレディ ー心の旅ー	レオ・パス カーリア	文学 (絵本)	仕事・生・死・命・ 永遠・変化	平易・擬人化・比 喩・言い換え	0.5
6	わすれられないおく りもの	スーザン・ バーレイ	文学 (絵本)	仕事・生・死・命・ 永遠	平易	0.5
7	発展読書	学習テーマにつながるのある本を読み、自分の考えを広げたり深めたりする。				2
8	作文	今までの学習を自分なりにとらえ直し、文章作作成。パソコン入力をして 文集完成。				2
※随所に、今ある諸問題（地震・津波・戦争・生きる意味や死について考えさせられる事件など）を指摘したり、学習テーマに関わる言葉（例 選抜高校野球大会の宣誓・都市対抗野球大会の宣誓）を新聞記事などを使って確認したりしながら、学習と現実の生活とをつなぐ試みを続けていく。						
※ 第7単元と第8単元との間には、時間をおき、取材をさせておく。						

6 第4単元（平家物語）の目標

- ①会話や人間の描写、情景描写を通して人物の心情を読み取り、人生最後の生き方を比較しながら読みを深める。
- ②平家物語』の持つリズムなどから、古文を読む楽しさを味わう。

7 本時で扱う学習材設定の理由

未知の事象との出会い（死を意識して生きること、充実した生き方をするという考えかたとの出会い）→課題発見（言語表現を辿ることにより、様々な疑問を解決していくことで、激動の時代を生きる武士的人間像をイメージ豊かにとらえていく。）→再構築された見方（今回学習した内容やテーマが、昔話だけではなく現実の自分の日常生活においても生かせることを知り、自分の「生き方」への意識を

深くする。)という流れとなる。

なお、この単元は現代文(説明文・随筆・小説)と古文を共に学ぶ形になっている。

2年生は今回、初めての本格的古典に挑戦することになる。古文にこだわらず、さまざまなジャンルの文章と古文を読み比べることにより、現代と違う世界や価値観が存在していたことを知って理解を深めたり、現代と変わらぬ人間のありようにふれて古典と現代文のつながりを意識したりすることができ、視野を広げていくことができる。つまり、「横への広がり」を実感することができるのである。

古文は言葉や時代背景の壁が大きいので、音読・暗唱学習を多用し、抵抗感を下げていきたい。

8 第4単元『平家物語』の、学習指導計画(7時間扱い)

第1次 平家物語オリエンテーション(2)

第1時 武士の思想(死の受けとめかた・名をのこす・名乗り)、作者、成立年代、中心的思想、文体

第2時 語りの文学(「祇園精舎」と「敦盛の最期」の平曲鑑賞)、物語の概要、学習財の製本、系図の見方。

第2次 さまざまな武士がどのように、死を意識しつつ生きたかを読む【その1】(2)

第1時 「木曾の最期」において、義仲と今井四郎兼平、(巴)の最後の生きざまを読み取る。

第2時 「知章の最期」を読み、わが子知章を見捨てざるを得なかった知盛の苦悩を読み取る。

第3次 「壇の浦の合戦」を読み取る。(2)

第1時 壇の浦の合戦までの物語の概要を知る。

第2時 壇の浦の合戦で最期を迎えた平氏の中で、「平宗盛」「平教経」「平知盛」の三人に焦点をしぼり、作品における三人の役割を考えることで、作者の意図を推測する。

第4次 その他の場面で、様々な武士がどのように、死を意識しつつ生きたかを読む【その2】(1)

「那須の与一」「忠度の最期」などを読み、死を意識しつつ生きた人々の姿を知ること、自分の考えを深める。

9 第4単元の、評価規準

観点	関心・意欲・態度	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
評価 規準	1 意欲を持って、古文を音読・暗唱したり仲間との話し合いに参加したりする。	1 古文独自の表現の仕方や古文の特徴に注意して平家物語を読んでいる。 2 平家物語に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像して自分の意見と比べている。
評価 規準 の例	B 繰り返し音読することで暗唱にいたることができる。 B 仲間の意見に耳を傾けながら、昔の人の生き方・ものの考え方や作品における登場人物の役割を理解しようと努力することができる。	B 歴史的仮名遣いを意識した音読をとおして、古語と現代語との発音やリズムの違いを指摘し、語りの文学である平家物語ならではの、七五調や情景描写に気がつくことができる。 B さまざまな武士の生き方を重ねて読んだり、同じ人物におけるさまざまな場面での言動を重ねて読んだりすることで、共通点や相違点を挙げるすることができる。 B 武士や作者のものの見方・考え方を想像したうえで、自分やまわりの人々と比較し、自分の考えを表現することができる。

①本時の目標

を考へること、作者の意図や構成を考へ始める。

[illegible]

観 点	評 価 規 準
<p>① 伝統的な原書文化と国語の特質に関する事項</p> <p>② 国語への関心・意欲・態度</p>	<p>評 価 規 準</p> <p>① 国語の特質に関する事項</p> <p>② 国語への関心・意欲・態度</p> <p>③ 国語の活用に関する事項</p> <p>④ 国語の理解に関する事項</p> <p>⑤ 国語の表現に関する事項</p> <p>⑥ 国語の文化に関する事項</p> <p>⑦ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>⑧ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>⑨ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>⑩ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>⑪ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>⑫ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>⑬ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>⑭ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>⑮ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>⑯ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>⑰ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>⑱ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>⑲ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>⑳ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉑ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉒ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉓ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉔ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉕ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉖ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉗ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉘ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉙ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉚ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉛ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉜ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉝ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉞ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㉟ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊱ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊲ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊳ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊴ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊵ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊶ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊷ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊸ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊹ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊺ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊻ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊼ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊽ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊾ 国語の学習態度に関する事項</p> <p>㊿ 国語の学習態度に関する事項</p>

3 実践例の考察

3. 1 学習者の反応

平家物語の学習を始めるまでに「死生学」「自分の役割」について語る様々な文章にふれていたために、「もっと生きたかったのに亡くなった津波の被害者を考えると、自分が今生きていることに意味があると感じる。」 「死から逃げるのではなく、人生のゴールまでに何かを成し遂げよう、と人生の見方が変わるのを感じた。」という生徒の文章が語るように、新しい考え方が生まれつつある生徒も増えてきた。平家物語の中でさまざまな人の「最後の生き方」を読むにあたり、武士が死とどのように真剣に向かい合って生きたかを意識して読む者が増えた。

反面、まだ物語を断片的・表面的にしか見ず、武士が精いっぱい見せた最後の生きざまに対して、「ありえないし。」のひとことで思考停止する生徒や、義経が出っ歯だという記述に大喜びして終わる生徒がいることも確かである。これらの生徒にはより深く物語を読もうとする気持ちを持たせ、ここでの学びや考えたことがゆくゆくは自分のこれからの生き方にもつながっていくことに、気づかせていく必要があった。また、死を美化することのないように、また肉親の死を経験した何人もの生徒の気持ちを配慮しつつ、授業をすすめていくことも必要であった。

3. 1. 1 「知章の最期」を読んだ学習者の反応

「知章の最期」は中学校では教材化されにくい部分である。しかし今回の実践では欠かせない教材となった。平知章は平知盛の子である。負け戦となって共に逃げる最中、知盛は敵に襲われる。知章は父と敵の間に割って入り、最後には戦死する。その間、父である知盛はどうしたか？逃げたのである。無事に助け舟に乗り、敵の手に渡るよりはと矢を射かけようとする仲間から愛馬の命を救い、息子を見捨てて逃げた自分をさめざめと泣くのである。学習者は当然、「息子の命を見捨てて逃げる卑怯な男」として受けとめ、批判したり情けなく思ったりする。しかしここで知盛には「事実上の平家の司令塔」としての役割があることを知らせる。すると学習者は「死ぬに死ねない知盛」の苦悩に気づき、動揺が走る。知盛を単純に批判することができないことがわかったからだ。

さらにたたみかけるように、3月11日の東日本大震災を思い起こさせた。自分一人で逃げることは可能であったのに、お年寄りを背負って逃げるうちに大津波に飲まれた消防団員。正面から来る津波に最期まで向かい合って、交差点で車の誘導をしていた警察官。津波にのまれる瞬間まで避難を呼びかけるマイクを離さなかった職員。またはそんな彼らを知りながら、自分は無事に生き残ったという人々。彼らは「知章」であり「知盛」である。まさに古典と現実がつながった瞬間であった。学習者は自然にまわりと意見交流をはじめ、「さりはか一ど」にも記した。こうすることによって、学習集団の一人ひとりの到達点が全員に披露され、それは次の時間にも引き継がれていくのである。

今日の発見→「知盛の思いと同じ思いを抱いた人が震災でたくさんいた。」「死ぬことも辛いが生き残った人はもっと辛い。」「守られるべき命には守るべき命の重さがある。」「知盛は生き残った者の苦悩を伝える役割を持っていた。」「宗盛はボンボンなのに意外とよいことを言ってる。」

今日の一口感想→「知章の親を思う気持ちと知盛の子を想う気持ちが美しい。」「知盛の決断はしょうがなかったと思う。」「知盛の行動が正しいか正しくないかは誰にもわからない。」「自分の子は見殺しにして馬は生かすという知盛はおかしいと思った。しかしそれは自分の役割を考えたからか？知章の死は仕方なかったのか。死んでも仕方ない人などいるのか？」「息子を助けたくても助けられず、死ぬに死ねず生き延びてしまう過去を背負った知盛。彼はその後精一杯



戦い抜くことができるのか？続きが気になる。」「知盛は知章の分まで生きなければならない。」「知盛と震災で生き残った人たちを重ねて考えて、知盛がどれほど辛かっただろうかと心がいたんだ。」「知章のように誰かのために死ぬのはすごいけど、生き残った人はその人の命も背負って生きるので、とても辛いと思う。3月11日にはそういうことがいっぱいあった。」「目の前に助けたい命があるのに助けられない。どんなにやりきれない思いだろうか。」「運よく生き残っても罪悪感が残る場合も多い。」「改めて精一杯自分も生きていきたいと思った。」

3. 1. 2 「壇の浦の合戦」を読んだ学習者の反応

これはかつて教科書にも載ったことがある教材である。現在は学習者と年齢が近いからか、「敦盛の最期」が載ることが多いが、「壇の浦の合戦」はまさに平家が滅亡する場面であるから、『平家物語』らしさがよく出ている場面である。(ただし、長い話の一部を載せなくてはならないので、短くまとまっている「敦盛の最期」よりわかりにくいことは否めない。)

今回はこの教材を単独で使うのではなく、上記の単元の中の一つとして扱うことにより、この教材に新しい命を吹き込むことに成功した。

教科書教材「壇の浦の合戦」にはたくさんのダイジェストがあるが、原文が載せられているのは平教経と平知盛の死の場面である。この二人の死にさま(＝最後の生き方)の対比をすることにより、「壮絶な最期(教経)」と、「最後まで沈着冷静な最期(知盛)」という、武士が理想とする2つのタイプの最期が描かれていることが読みとれる。しかし、この課題を教師のほうから投げ込むより、学習者から発見する形にしたいと、私は考えた。

ここに私は教材化されている場面より前に描かれる、「平家がもはやこれまでとなったとき、平宗盛は部下に促されても入水することができず、ついに部下に海の中に落とされる。それでも泳いでしまい、捕虜となる。」という場面を加えることにした。宗盛が武士の理想とは全く逆に描かれていることは、誰にでもわかる。案の定、この場面では学習者は笑った。

そのうえで、本当は教経は前の戦いで戦死したという説もあることを紹介し、「平家が滅亡する壇の浦の合戦において、なぜ平家物語の作者は、①宗盛 ②教経 ③知盛の順に記述したのか。」を課題と

S1「宗盛は武士としての決断ができない。最後まで生きたいという欲がある。つまり人間の欲を示す役割がある。」

S2「宗盛は泳いじゃうし、知盛は何もしなくてかっこ悪いから、一人でもかっこいい人を入れた方がよいと思って、少しでも平家に花を持たせるために、教経を入れた。」

S3「知盛って、地味だよな。」

S4「教経みたいなかっこいい死に方、戦って死ぬという死に方ばかりが武士らしさじゃないと思うな。どうやって物語を終わらせるかって考えた時、知盛を最後にしたほうが、物語の話をしめる役として最適。すうっと終わったほうが余韻もあって、聞いているほうもすっきりする。」

S5「平家の戦いを見届ける役割。平家の事実上の総大将として責任を全うする感じ。」

T「知盛は戦っているシーンはないけれど、リーダーとしての役割はしっかり果たしているね。」

S6「もう入水とか自害しかないというとき、みんながてんでにわあわあやってる中で死ぬより、リーダーが最後まで自分たちを見届けてくれてるってなると、なんか安心する。」

T「そうだね。辛いけど、それもリーダーの大事な役割だね。」

S7「宗盛はみんなをがっかりさせておいて、その後、教経でウオッと驚かせる役割。引き立て役。」

T「そう、そのとおり。ヒーローもののお話でも、必ず困ったチャンが出てくるよね。全員ヒーローだと輝かないけど、困ったチャンがいるおかげで、ヒーローの仕事ぶりのすばらしさがひきたつというわけ。だから、いったん宗盛で落として、次に教経でものすごく輝かせて、最後に知盛で静かに幕を引く、という絶妙の構成を、作者は考えて、人物を配置したんだね。」

して提示した。学習者は3人のうち最も「気になる」人のところに集まり、その人物を中心に役割を考えていった。学び合いの観点から見れば、40人一緒の一斉学習よりは小集団によるバズ・セッション形式の方が効果的だと考えたからである。(P. 17参照)

「さりはか一ど」より

今日の発見→「宗盛はダサい、かっこ悪いしかないと考えたけど、引き立て役という大切な役割があった。びっくりした。」「登場する順番にも工夫があった。」「物語には仕掛けがあった!」

今日の一口感想→「登場人物はそれぞれ役割があると改めてわかった。」「何度読んでも教経はかっこいい。しかしそう思わせる仕掛けもあったのか。」「知盛の死に方がかっこよく見えるのは、リーダーとしての役割を果たしたから。」「知盛のようなリーダーになりたい。」「人それぞれの武士道があるので、十人十色だと思った。」「深く追究しなければ見つからないこの役割を、しっかり理解できてよかった。」「物語の終わらせ方など、この作者はすごい!」「登場人物の役割に視点を置いて読むのも面白いと思った。」

3. 2 成果と課題

【成果】

- ・平家物語は昔から教材として取り扱われてきた、教材としての宝庫である。教材化や指導方法についてはかなり研究がなされているが、今回は新しい場면을教材化することと、以前からある教材の扱いを変えることで、従来にはない平家物語の魅力を学習者に提供することができた。
- ・平家物語での学びが、ただ内容を理解することだけにとどまらず、学習者の今、学習者の将来を導く起爆剤となることで、今回の学びは学習者にとっての「古典」となる。

例えば今回、「知章の最期」と「東日本大震災での悲劇」をつなげることにより、教材が内容読解の域にとどまらず、今の自分を取り巻くさまざまなできごとと関連があることが学習者に実感された。今すぐ答えは出ないかもしれないが、深く考えていこうとする姿勢、自分のこととして寄り添って考えていこうとする姿勢が見られた。

また例えば、「壇の浦の合戦」において、登場人物の役割や配置に注目させることにより、物語の仕掛けに興味を持ち、平家物語以外の小説でも「人物の役割・配置」を意識して読もうとする新たな視点が生まれた。「どんな人にも役割がある」という発見は、学習者自身の生き方に自信ももたらしした。

- ・「学び合い」の観点でいけば、全員の考えをほぼリアルタイムで全員が掌握できるということは学習者に喜びをもたらし、絶大なる効果を挙げた。仲間の考えを分析しあうことにより、次の学習の課題や関心を各自が高めていったように思える。

【課題】

- ・今回は精読ではなく多読の形式をとった。限られた授業時数の中で、内容理解・言語や表現の重点指導・これらや他教材との関連をもとにした深い思考など、おさえるべきことは多いが、さらに厳選していく必要がある。
- ・学び合いの点では、授業と授業をつなぐ「さりはか一ど」は大変有効であった。さらに授業中での学び合いを促す意味で、班活動、氏名カードを使つての意思表示などの方法を使つたが、きめの細かさでは欠けるところもあった。これを今後の課題としたい。

【参考文献】

- ・注1「学び合いで輝く・伸びる・高め合う 東京学芸大学附属小金井中学校の教育」東洋館出版社 2007年11月6日 より 松原洋子、第1節『「さりはか一ど」いつも全員 発言者』22—23頁